

富山大空襲で焼け野原になった富山市中心部。右奥の建物は富山大和＝1945年８月２日朝、富山電気ビル屋上から撮影

富山大空襲 伝えたい

今年の夏、日本は終戦から80年を迎える。太平洋戦争では県内から出征した兵士が命を落とし、富山大空襲でも大勢の人が犠牲になった。昭和から平成、令和と時は流れ、戦争体験者の多くがこの世を去り、遺族の高齢化も進む。悲劇の伝承が難しさを増す一方で、県内では民間の団体が空襲資料の常設展示を目指して活動を強化。若者が惨禍の記憶の語り部となり、次代につなぐ動きも出てきた。

戦後80年

死者2700人超 99.5%破壊

「富山大空襲を語り継ぐ会」は、1945年8月の富山大空襲に関する資料を常設展示する場の開設を目指している。富山市は本土空襲の中でも甚大な被害を受けた都市として知られるが、県や市によると、被害を伝えるまとまった資料を並べ、いつでも見られる場所はないという。戦後80年となる今年、同会は市に早期の開設を訴えていく。

45年8月2日未明の富山大空襲は一夜で富山市中心部を焼き尽くした。米軍の爆撃機B29が50万発以上の焼夷弾を投下。爆撃目標区域の99・5%を破壊し、2700人超が亡くなった。

空襲などの戦争資料を巡っては、県が遺品約950点を保管するが、毎年夏に一部を展示するのみ。遺族が県外の資料館に寄贈する例もあり、戦禍を県民に伝えていく上で展示と収集の両方が課題となっている。

語り継ぐ会は94年の設立以来、県や富山市に空襲資料館の建設を求めてきたが実現しないまま、体験者が減っていく中、記憶の風化や資料散逸を防ぐため2023年、空襲があった市中心部に常設展示スペースを設けようと活動を始めた。

会への賛同の輪は広がっている。目標の「開設に充てる協賛金300万円、署名3千人分」に対し、市内の企業など30社から220万円、署名は800人分が寄せられた。同市の県議と市議も、超党派の「富山大空襲を語り継ぐ議員の会」（発起人・中川忠昭県議）を近く設立する方針だ。

資料の常設展示目指す

語り継ぐ会

語り継ぐ会は昨夏、空襲のあった新潟県長岡市が03年に設けた長岡戦災資料館を視察した。今年は、同館と富山の資料の交換展示なども通じて開設の機運を高め、富山市に要望したい考え。代表幹事の高安昌敏さん（77）は「能登半島地震で遺品が処分されている恐れもある。収集を急ぎつつ、市に一日も早い開設を求めたい」と強調した。



今年の活動内容を話し合う高安さん（左から３人目）ら語り継ぐ会のメンバー＝昨年12月、県民会館

証言・情報を募集

空襲や出征、抑留など「太平洋戦争と県民」に関する埋もれた事実を掘り起こし、将来に残すため、皆さんの証言や、継承の取り組みなどの情報をお寄せください。はがきや手紙の宛先は〒930―0094富山市安住町２の14、北日本新聞社会部「戦後80年」係。ファクスは076（431）2110。メールはsengo80@ma.kitanippon.co.jp

webun＋ 戦跡マップ公開

北日本新聞社は総合情報サイト「webunプラス」で、太平洋戦争の被害を示す写真や、慰霊碑などをデジタル地図上で示す「とやま戦跡マップ」を公開した。地図上に戦跡を示し、身近な場所が戦災に見舞われたことを伝える。スマートフォンでも閲覧でき、戦跡巡りにも活用できる。

富山大空襲直後の富山市の写真や、旧陸軍が砲弾の命中率を確認するため昭和初期に作った「監的壕」（南砺市）などを紹介。太平洋戦争に限らず、戦争に関わる県内の遺構やモニュメントなどを随時追加していく。

▲「とやま戦跡マップ」はこちら

遺品収集 ＰＲ強化 富山市

富山市は、富山大空襲の惨禍を伝える遺品や資料を市内外から募り、デジタルアーカイブとしてホームページ（ＨＰ）で公開している。収集が年々難しくなる中、市は「戦後80年の節目が最後の機会」との思いでＰＲに力を注ぐ考えだ。

事業は2019年、毎年8月1日に開き、富山大空襲の犠牲者を追悼する「富山市民感謝と誓いのつどい」の実行委員会と共同で始めた。寄せられたものをデータ化し、ＨＰ「未来に語り継ぐ富山大空襲の記憶」に載せる。原則返却し、寄贈の意向があれば保管している。

19年以降に集まったのは防空頭巾や砲弾など11点。昨年、亡き父の軍服などを寄せた富山市石金の野畑美恵さんは「子どもたちが戦争について考えるきっかけになれば」と願う。

北日本新聞社共催。遺品・資料の受け付けや問い合わせは同社メディアビジネス局開発部、電話076（445）3326。



富山市に寄せられた遺品の一部。時計回りに上から防空頭巾、溶けたくぎの塊、高射砲の砲弾、砲弾

高校生が語り部に



1年目の活動を振り返る薬師さん（左から2人目）ら輪音の高校生たち＝昨年12月、ウイング・ウイング高岡

「活動を通じて戦争の恐ろしさを学んだ」。県内の高校生有志でつくるグループ「輪音」の代表、薬師子龍さん(17)＝高岡南2年＝が振り返る。グループは昨年2月の発足以降、空襲体験者の証言を聞き取り、子ども食堂や放課後児童クラブで伝えてきた。

グループを立ち上げたのは薬師さん。戦争体験者の曽祖母（享年99）の死がきっかけだった。中学や高校の同級生らを誘い、現在は高岡南、富山国際大付属、富山中部、新湊高校の1、2年生計10人で活動。子ども向けの平和講座を開き、交流サイト（ＳＮＳ）でも戦争体験談を発信する。

今年は、より多くの県民に伝えるためのイベントを考えている。3年生になる7人は受験を控えて活動が難しくなるが、富山国際大付属1年の畔川拓人さん(16)は「先輩たちの思いを引き継ぎ、活動を広げていく」と意気込む。薬師さんも「体験者からつないでもらった平和のバトンを次の世代に渡せるよう、大学生になっても続けたい」と語る。